

論文審査の結果の要旨

氏名：三井 梨紗子

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：評定競技のエキスパートコーチにおける実践知の構造に関する研究：

アーティスティックスイミング競技のコーチングに着目して

審査委員：(主査) 教授 水落 文夫

(副査) 教授 鈴木 理 教授 高橋 正則

日本大学理工学部教授 北村 勝朗

スポーツ領域のコーチにとって、選手の競技力を向上させるための支援を行うことは重要な役割である。ただしコーチング実践は、コーチと選手のみならず練習環境や場の状況といった様々な要因が関わりあう、動的で相互依存的な複雑性をもつ。とりわけアーティスティックスイミング (AS) 競技などの評定競技は、選手の動き（演技）に対する成績評価が、審判の主観的な見方あるいは見え方に少なからず影響を受けるため、客観的な評価が難しい。そのような状況の中でも、自らの経験や知識をもとに適切な意思決定を行い、長年にわたって世界トップレベルのアスリートを育成し続けているコーチが存在する。そのエキスパートコーチは、特定の競技状況における多様なコーチングの現場で培ってきた実践知を有している。三井氏の述べるリサーチエスション「エキスパートコーチはコーチングの場において何が見えているのか、何を見ようとしているのか、コーチングの先に何を見ているのか」は、コーチング学の研究者として当然の関心といえよう。この複雑性と流動性に富み、理論的知識だけではなかなか解決できそうもない課題に対して、長年にわたり課題達成をしてきたエキスパートコーチの実践知の解明は、極めて興味深い研究テーマであり、この研究の学術的意義およびコーチング実践の場への貢献は、今後の研究展開を含めて期待されるところである。

本研究の目的は、評定競技である AS 競技エキスパートコーチ 1 名のコーチングに関する実践知を、質的研究手法を用いて多角的な視点から分析することで、その構造化を試み、コーチと選手の育成に寄与する知見を得ることである。この目的を達成するために、実践知の全体を定義し、「コーチング理念」「指導観」「コーチング行動」の 3 つの視点（研究課題）と、それぞれの課題に対応する研究方法論として質的研究手法を採用し、エキスパートコーチの実践知に関する検討を行っている。

ただし、この論文は、エキスパートコーチの実践知に関する一般理論の構築を目指すものではない。現状でコーチング学分野におけるコーチの実践知研究が途に就いた段階のため、現時点での問題関心は、個別事例の分析による知見の蓄積から実践知の構造を創造する段階といえる。本研究の分析対象となったコーチは、AS 競技におけるハイパフォーマンスアスリートの育成という特定の状況に適応したエキスパートであり、極めて稀少および貴重な事例である。その点では、単なる一つの事例ではなく、その域を超えたプロトタイプ（典型）といえる。長く選手あるいはコーチとして、そのコーチングの場に対峙してきた三井氏は、エキスパートコーチを深く理解できる専門性を備えた実践的研究者であるがゆえに、その典型性を担保したうえで、エキスパートがもつ本質的で密度の濃い経験を読み解くことを可能にしている。そのことは、この研究の立ち位置を見据えた上での独創性と先見性を保持する基盤となっている。

論文は 6 つの章で構成される。スポーツ領域におけるコーチング、評定競技と AS 競技、エキスパートコーチ、専門知識と実践知といった主要概念に関わる研究の背景および先行研究の動向を検討した第 1 章序論に始まり、本論となる第 2 章から第 4 章では、3 つの研究課題に対応する「エキスパートコーチの経験に基づくコーチング理念の形成過程」「AS 競技におけるエキスパートコーチの指導観」「エキスパートコーチの技術指導における選手とコーチの行動分析」といった視点から、エキスパートコーチの実践知を構成する要素を余すことなく拾いあげている。そして、第 5 章総合考察および第 6 章総括において、要素間の関係などをまとめて実践知の構造化を進め、研究の成果として新たな知見を提示し、これをもとにコー

チング実践の場に提言することを実現している。構造化によって概念化を目指すという研究課題に対して、対象概念に関わる全体を定義づけ、その構成要素を整理し、要素間の関係性を読み解き、共通する点を抽象化して概念にまとめるという質的研究の手続きは、この研究の目的を達成するために妥当な方略であると認められる。それに限らず、この緻密な段階的分析手続きと多角的な視点に基づく要素探索の組合せは、コーチング学領域における実践知研究の重要なアプローチであり、その研究方略の実効性を示したという意義も認められる。今後は、現状でまとめられた概念の拡張、あるいは他の事例にも見出せる普遍的な知見を探ることで、より深く意味や問題を見出せるモデルの提示も期待される。

続いて、本研究で得られた成果を提示する。

序論では、国内のスポーツコーチングの実践知研究について、個別実践事例の開示・蓄積から実践知の創造を経て、より普遍性を帯びたモデルの構築と方法論確立を目指す方向性が期待されているものの、それらを提示するほどの事例と知見が集まっていない現状を示している。また、評定競技に関する研究では、選手の獲得した技術や、これを支える身体的・心理的スキルに注目した量的分析による研究知見が中心であり、コーチングにおけるコーチおよび両者の関係に着目した研究がほとんどみられない現状を明らかにしている。したがって、評定競技に限らず、コーチの実践知に関する研究の初期段階では、選手育成に実績をもつ AS 競技のエキスパートコーチの実践知を質的研究手法によって探索することが、今後のこの方面の研究のための基礎を築くうえで有効としている。これらの広範な調査に基づく、研究動向と課題および期待される研究の方向性を踏まえた、研究目的と研究デザインの設定は、本研究が高い成果を生み出す大きな要因になっている。ただし、コーチング研究やコーチの専門知識に関連する研究は、国内および英語圏以外にも研究の潮流がみられ、関連領域であるスポーツ運動学にも実践知に関する研究がすでに一定の領域として認められる。この研究の価値を高めるには、バックグラウンドとなる主要な概念の定義に対して、より確かなエビデンスを基礎にしなければならない。

第 2 章では、非構造化インタビュー法によって収集した、現在に至るまでに経験した出来事に関するエピソードを中心とした発話データを、ライフストーリーとして組み上げ、「コーチング理念」とその形成過程について記述している。第 3 章では、深層的半構造化インタビュー法によって、コーチング実践における出来事、意図、視点に関する発話データを幅広く収集し、明示的で段階的な分析手続きを踏むことができる SCAT 法により「指導観」を導いている。第 4 章では、コーチング実践場面を研究者である三井氏が参与観察し、その後に再生刺激法を用いたインタビュー調査を併用することで観察データと発話データを収集し、エピソード記述法を用いて様々な文脈に修飾されたコーチと選手たちの相互作用を記述している。そして、「コーチング理念」と「指導観」で形作られた実践知が、「コーチング行動」としてどのように再構成されて表出するのか検討している。こうして、それぞれの研究課題（視点）に対応した質的研究手法を用いることで、長期にわたり本質的で密度の高い経験を積み重ねてきたエキスパートコーチの実践知の深層を明らかにしている。その中にはこれまでにない実践知に関する知見も含まれている。

たとえば、AS 競技のエキスパートコーチは、経験の積み重ねによって培われたコーチング理念の中に目指す選手の理想像があり、それは「アスリート」の枠やコーチの想定を超越し、自らの力で切り拓くことができる「アーティスト」としての選手であった。このような選手を育成するために、コーチは自らが指導できる限界を受け入れ、コーチが見えている世界だけに頼ることのない多角的な視点をもつようになる。すなわち、コーチは目の前の選手に対して、自らが教えきことを目標としていない。このような確固たる理念に基づき、コーチはあえて選手同士が互いを観察しやすい場をつくり、選手やチームのブランディングを行う。また、これまでの授業実践の場で提示されていた実践知の特徴である「全体性」は、コーチング実践においても同様の特徴として確認している。ただし、コーチはそれに限らず、その場にある様々な要素をコーチ自らが積極的に動かせる「意図的な場」を作りあげる。さらに評定競技では、審判に動きがどう見えるか、審判が見る美しさとはどういうものかという視点を選手とコーチが共有する必要がある。コーチはそれを踏まえて審判や選手の視点を使い分けるとともに、選手にもこういった「メタ的な視点」を育成するような学びの仕掛けをつくる。このように実践知に関わる多様な知見を挙げることができる。

本研究には残された課題がある。①主要な概念の枠組みを明確にして研究の限界を見据えること、②研究知見の解釈可能性を高めるために発話データから意味や意図を読み解くスキルを向上させること、③多角的な視点を採用したが故の次元の異なる要素による構造化を工夫すること、④他の事例や他競技のコー

チを対象としたデータ収集に基づく普遍性を帯びた知見の追究を進めることなどである。これらの課題の検討により研究成果の価値はさらに高められると考えられる。

以上のように、いくつかの課題は残されているものの、AS 競技エキスパートコーチの実践知について、多角的な視点と精緻な質的研究手法をもって探究し、その概念化を推し進めた本研究の成果は、コーチング学的发展とコーチング実践の高度化に貢献するものであり、これまでにない知見をまとめることを実現していることから、オリジナリティおよび完成度の高い優れた研究として評価することができる。

よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令 和 4 年 1 月 2 0 日